

親鸞仏教センター通信

2009.
December

2009年12月1日発行

発行者 本多 弘之

編集・発行 親鸞仏教センター（真宗大谷派）

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

TEL. 03-3814-4900 FAX. 03-3814-4901

e-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

ホームページ <http://shinran-bc.tomo-net.or.jp>

第32号

法名としての「釈親鸞」

親鸞仏教センター所長 本 多 弘 之

「愚禿釈親鸞」の名について、『歎異抄』の法難記録にある「流罪以後愚禿親鸞と書かしめたまうなり」（『真宗聖典』642頁、東本願寺出版部〈以下、『聖典』と略記〉）の文を根拠として、「釈親鸞」は流罪赦免以後に自分で名告ったのだ、という説が流布している。これに対して、「親鸞」の名は師源空からいただいたものだ、という主張が提起されている。筆者も、この源空上人命名説を全面的に支持したい。その根拠を少し述べてみたい。

この議論はすでに古い伝承もあるらしいし、最近もこれを支持されている方々がある。その場合の根拠として、『教行信証』後序の「綽空の字を改めて、…名の字を書かしめたまい^{おわり}畢りぬ」（『聖典』400頁）の「名の字」が実名なのだから、坊号である「善信」とするのはおかしい、という論究の仕方があり、現今の議論の中心が「善信」は坊号か実名かということに集中している節がある。今、ここではその議論に巻き込まれるのではなく、別の観点を提出して、皆さまに再考していただきたいと思う。

何よりも、親鸞聖人の^{のついで}畢生の著書である『教行信証』が「愚禿釈親鸞」の名で書かれているということがある。総序・別序には「愚禿釈親鸞」とわざわざ自分の主体の名告りを出し、後序では「愚禿釈の鸞」と出される。そして、各巻巻頭の撰号にも「愚禿釈親鸞」を置かれている。このことは、この名告りのもとに自分が仏法に値遇した恩徳に^{ちきう}応えるために、この書物を制作して法界に捧げるのだという意志があるといわなければならない。その名に「釈」の字を加えているということは、罪業深重の身にもかかわらず、本願力の回向に値遇することによって、「真の仏弟子」とされたということを表明している。資格なくして仏法の大海に導き入れていただいた感激が、「釈」の名のもとに報謝の制作事業を相続させたのだということであろう。

「仏弟子」の名とは、釈尊以来、仏法を相続してきた共同体に参入を許された証である。近くは仏法伝持の師からその弟子になった証明として、名前をいただいて「法名」を名告るのである。断じて自分で勝手に名告るものではない。しかも、後序はこの著の「事由」を語る場所であり、「真宗興隆の大祖源空法師」（『聖典』398頁）との因縁を語って「名の字」をいただいたといい、「悲喜の涙を抑えて由来の縁を^{しる}註す」（『聖典』400頁）と書いている。その数年後にこの因縁を捨てて勝手に自分で「釈」の名告りをするはずがない、と筆者は信ずるのである。

親鸞仏教センター連続講座「親鸞思想の解明」

「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」⑫

「天耳」—聞くという力

親鸞仏教センター所長 本多 弘 之



本多弘之 所長

連続講座「親鸞思想の解明」は、「浄土を求めさせたもの—『大無量寿経』を読む—」の第26回から28回が東京国際フォーラム（有楽町）で行われた。第26回では、「第十一願（続）」について、第27回では、「第十一願（続）」と第十二願について、そして第28回では、「第十二願（続）」と第十三願について、センター所長・本多弘之が問題提起をし、有識者と一般参加者の方々との間で活発な質疑応答がなされた。ここでは、先に行われた第23回からその一部を紹介する。

（嘱託研究員 越部良一）

■ 聞くことは信ずること

四十八願の第七願に來ますと、「たとい我、仏を得んに、国の中の人天、^{てんじ}天耳を得ずして、下、百千億那由他の諸仏の所説を聞きて、ことごとく受持せざるに至らば、正覚を取らじ」（『真宗聖典』16頁、東本願寺出版部〈以下、『聖典』と略記〉）と。これはすごい願だなと思うのですが、「天耳」というのは、天に通ずる耳といいますか、「諸仏の所説」とありますから、仏さま方の説かれるところを聞く。聞くというのは、諸仏が説く言葉を通して、存在の真理、命の真実を聞く。

聞くということは、身体の機能としての耳で聞くという形になっているのですけれども、先に真理に出遇った人たちが、ああ、このことを知ることによって、これだけ歓びがある、これだけ解放される。そういう自分の出遇った体験内容を伝えようとして言葉にする。その言葉を通して、真理に出遇った人の体験をいただく。

自分がまた新たにその真理に出遇う。その出遇う方法を「聞く」というのだろーと思うのです。

親鸞は、信ずることと聞くことは一つのことだと言います。本当に聞くということは、本当に信ずることがなければできない。「聞」と言うは、衆生、仏願の生起・本末を聞きて疑心あることなし（『教行信証』『聖典』240頁）と。何のために仏の願いが語られるのか、その起こってくるいわれ、それを聞く。聞くといっても、耳で聞くのではない。言葉は、一応、耳を通すこともありますけれども、耳を通すにしろ、言葉が言われたら、そのことを、譬喩的に言えば、胸で受けとめてしっかり味わう。そして、疑いが晴れる。何を言っているのだろーということから始まって、大体こういうことだろーかということから、ああ、そうだったのだというように腑に落ちる。五臓六腑に染み渡るまで、真理が自分の中に入ってくる。そういうことを聞くというのでしょうか。

■ 聞くことの難しさ

だから、聞くというのは難しいわけです。疑心が、その壁になるわけです。そんなことを言ったってとか、そうは言うけれどもとか、何か自分勝手な論理とか言葉で遮る。だから、ずっと真理自身に出遇えない。聞きながら疑いが晴れないということは、聞いてないということです。音は聞いているけれど、聞き当てていない。言葉が何を言い当てようとしているのかが見えないままに素通りしているのです。なかなかわからない。それでやたらに言葉に取りつかれれば、譬えるなら、この道をこう行けばい

いものを、横の路地のことばかりをいっぱい書いて、どこに行ったらいいのかわからなくなってしまうというような解釈をすることが多いわけです。それに後から行く者は惑わされる。汗牛充棟^{きゅうじゅうとう}している解釈学に惑わされて、大事な筋が見えなくなる。

そもそも「聞其名号 信心歓喜」(『聖典』44頁)の、名号を聞くということは、発音された音を聞くという意味ではない。ところが、「聞其名号」とあるから、名号を聞くというのは、誰かが発音した音を聞くのだろうと読んでしまうわけです。なぜ阿弥陀如来は、南無阿弥陀仏という名号を選んだのか、選択したのか。ああ、私のためであったのだと、「親鸞一人がためなりけり」(『歎異抄』『聖典』640頁)と聞き当てる。それは容易なことではないから、他人のためだと思ったり、愚か者のためだと思ったり、自分のためだとは思わない。

道綽禪師が引用している「耳なき人」(『教行信証』『聖典』173頁)、無耳人^{むにじん}という譬喩を親鸞は和讃で使っていますが(『聖典』487頁)、その耳なき人というのは、耳が聞こえないという意味ではない。本当のことを聞き当てる力がない。肉体としての耳はあっても、耳なき人である。それは、本願を聞くことができないのを哀れんで、仏陀がおっしゃる言葉です。われわれは、仏陀の言葉、親鸞の言葉を読み過ごしながら、何かよくわからない。本当に耳がないなというか、そういう感じが深いのですが、そういう意味で、誰であっても浄土に触れるならば、天耳^{てんじ}を得ると。天耳を得れば、無数の諸仏の言葉を聞いて、ことごとく受持する。「受持」というのは、智慧として保って失わないということです。仏陀の教えに本当に腑に落ちて頷くことが起こると、それはもう忘れない。

われわれは、愚かな凡夫ですから、天耳も何もないのですけれど、しかし、信心ということを問題にするときには、これはどこか響き合うところがある。何か、人間存在にとって大事なものを、本願が、今、呼びかけようとしている。そういうことは、いただけるのではないかと思います。

■ 聞くという力

最近、ヨーロッパやアメリカのような考え方で、ディベート (debate)、自分の言いたいことをどんどん言う、そういうことを奨励する。これはやはり、グローバルに他の文化と接していくためには、向こうがどんどん言いますから、こっちが黙っていたら居ないのと同じことになってしまいますから、どんどん言えというわけでしょうけれど、言うというところに、聞くということがついていることが大事なのではないかと思うのです。仏教は一番最初から「如是我聞」ですから、聞くことから出発して真理に出遇っていく。言うことの根に聞くということがあって、真理に聞いて、聞いていることを言う。私が先生方の仏法の話聞いていて、ああ、この先生の話聞きたいと思ったのは、その先生自身に聞いている姿勢があったからですね。聞かずに説こうという話は、全然聞きたくなかった。聞く耳をもとうとは思わなかった。やはり自分が聞いていくという、その姿勢が親鸞にもあったから、親鸞という人にもこうして引かれるし、まあ、とても尋ね当てられるものではないけれども、できるだけ親鸞という人の出遇った真理の近くまでは行きたい、そういうふうに使われるのは、やはり聞くという力だと思うのです。

(文責：親鸞仏教センター)

公開講座「親鸞思想の解明」のご案内

本講座は公開 (無料) で開催しています。

記

日時：2009年12月 休 講
2010年 1月19日(火)午後6時30分～9時
2月 4日(木)午後6時30分～9時

場所：有楽町・「東京国際フォーラム」Gブロック
JR、東京メトロともに「有楽町」駅より徒歩1分

テキスト：『真宗聖典』大判 ¥3,500、小判 ¥3,000

ご希望の方は、下記 (京都・東本願寺出版部) まで。

TEL 075-371-9189 FAX 075-371-9211

<https://books.higashihonganji.jp>

さまにて、あきらかなり。証誠護念の御ころは、『大經』にもあらわれたり。また称名の本願は、選択の正因たること、この悲願にあらわれたり。この文のころは、おもうほどはもうさず。これにておしはからせたまうべし。この文は、後善導法照禪師ともうす聖人の御釈なり。この和尚をば法道和尚と、慈覺大師はのたまえり。また『伝』には、廬山の弥陀和尚ともうす。浄業和尚ともうす。唐朝の光明寺の善導和尚の化身なり。このゆえに後善導ともうすなり。

(原文は、東本願寺発行の『真宗聖典』五四九〜五五〇頁)

語 註

- ①「おおよそ十方世界にあまなくひろまることは」「十方世界普流行」を註釈した先の文(『真宗聖典』五四八頁)を指す。「親鸞仏教センター通信」第27号掲載。
- ②「証誠護念」善導は、往生礼讃の中で、「阿弥陀經」の六方便を諸仏の証誠護念とみて、註釈を施している。その文を親鸞は、「教行信証(行巻)」「真宗聖典」一七六頁に引く。
- ③「御釈」経(仏や聖者の教説)、論(經文の深い意味を詳述したものの)の解釈。
- ④「無上涅槃」「親鸞仏教センター通信」第26号「試訳をめぐって」参照。

試訳をめぐって

【原文】「願生彼国」は、かのくにうまれんとねがえとなり。「即得往生」は、信心をうればすなわち往生するという。

【現代語訳】「願生彼国」は、浄土に生まれんと願え、という呼びかけである。「即得往生」は、その本願からの呼びかけに随順すること、すなわち、信心を得るならば即時に本願の用らく世界に生まれるという意味である。

七願に、あらゆる世界の数限りない諸仏に我が名を讃えられよう、称えられよう、そうでなければ仏に成るまいと誓われた。この誓いは、全てのものを等しく救い取る大いなる智慧の海のような誓願である。この誓願を成就されたことによってあらゆる世界に広く行きわたるのである。このことは、『阿弥陀經』に説かれている「証誠護念」、すなわち、あらゆる世界の諸仏が阿弥陀仏の功徳を讃嘆し、その誠を証明し、護念すると説かれていることから明らかである。「証誠護念」のお心は、『大經』にも表れている。また、御名を称えられようという願いこそ、如来の選ばれた正しい因であるということとは、この第十七の悲願において顕らかである。

この文の深意は、これ以上申すということはない。以上のことから、推し量って考えていただきたい。この『五会法事讃』の文は、後善導法照禪師という聖人の御解説である。この方を、慈覺大師は法道和尚とお呼びになっている。また諸伝には、廬山の弥陀和尚とも、浄業和尚とも記されている。唐代の光明寺の善導和尚の化身であるから、後善導と言うのである。

「願生彼国」とは、本願成就文(『真宗聖典』四四頁)の言葉である。すなわち、「欲生我国(我が国)に生まれんと欲え」という本願(第十八願、『真宗聖典』一八頁)からの呼びかけが成就して「願生彼国(彼の国)に生まれんと願う」という事実が我われのうえに起こる、ということである。親鸞は、この「願生彼国」について、「かのくにうまれんとねがえとなり」という註釈を施している。それは、「願生」ということの内実が、「自分で生まれんと願う」という、自力の願生ではないということを強調して言わんとするものである。つまり、「願生」それ自身が本願からの呼びかけであり、如来回向の心だと親鸞は言うのである。「信心」とは、その呼びかけをそのまま戴くことに他ならない。だからこそ、「願生」と「得生」は矛盾することなく、しかも即時に成り立つのである。この因果関係を明確にしようと、試訳を検討された。(親鸞は、このことを本願の欲生心成就の文(『教行信証』『真宗聖典』二三三頁)として確認している。)

『anjali』第18号および

『現代と親鸞』第19号を刊行

このたび、『anjali』第18号(写真上)並びに『現代と親鸞』第19号(写真下)を刊行しました。

『anjali』第18号では、同朋大学准教授の張偉氏、ジャーナリストの堤未果氏、慶應義塾大学商学部教授の中島隆信氏、反貧困ネットワーク事務局長の湯浅誠氏、國學院大学文学部教授の高橋昌一郎氏、気候ネットワーク代表で弁護士浅岡美恵氏、東洋英和女学院大学教授の西洋子氏、詩人の藤川幸之助氏、NPO法人「場の研究所」所長の清水博氏など、十名の専門分野の方々に、現代社会の課題や最先端での苦闘について、ご執筆いただいています。

一方の『現代と親鸞』第19号では研究論文のほか、「現代と親鸞の研究會」から、国立環境研究所特別客員研究員の西岡秀三氏の問題提起と質疑。「清沢満之研究會」から東京工芸大学芸術学部教授の加藤智見氏の講義と質疑。「現代の諸課題と対話する研究會」から爽風会佐々木病院診療部長の斎藤環氏のインタビュー内容。「公開講演会2008」から、神戸女学院大学教授の内田樹氏、本多弘之所長の講演。また、第1回親鸞仏教センター研究交流サロンから、物理学者の國府田隆夫氏、埼玉大学教授の有賀夏紀氏からの発題。さらに、「親鸞思想の解明」から、本多所長の問題提起(三講座分)を掲載しています。

anjali



現代と親鸞



『聖典』の試訳（現代語化）

「不退転」とは、現代においてもしばしば用いられる言葉だが、元は仏教用語である。退歩・退失・退墮（たいだつ）することがない、これが「不退転」本来の意味である。

この「不退転」という位を得ることが、求道において非常に大事にされてきた。すなわち、道を求めていつてもうこれでいい……という、そういう状況に落ち着いてしまいうことが求道者最大の難関とされてきたのである。いわゆる「菩薩の死」、「七地沈空の難」という問題である。

「信心をうれば……不退転に住す」と親鸞は言う。それは言い換えるならば、留まることがないということである。つまり、求道者は最大の難関である「菩薩の死」を超えて、仏への方向性・志願を失うことなく、歩み続けられるというところにほかならない。成仏道を生き抜くというのである。

（嘱託研究員 法隆誠幸）

『唯信鈔文意』試訳⑧

原文

『大経』には、「願生彼国 即得往生 住不退転」とのたまえり。「願生彼国」は、かのくにうまれんとねがえとなり。「即得往生」は、信心をうればすなわち往生するという。すなわち往生というは、不退転に住するをいう。不退転に住すというは、すなわち正定聚（しょうじょうじゆ）のくらいにさだまるとのたまう御（み）のりなり。これを「即得往生」とはもうすなり。「即」は、すなわちという。すなわちというは、ときをへず、日をへだてぬをいうなり。おおよそ十方世界にあまねくひろまることは、法蔵菩薩の四十八大願の中に、第十七の願に、十方無量の諸仏にわがなをほめられん、となえられんとかかいたまえる、一乗大智海の誓願、成就したまえるによりてなり。『阿弥陀経』の証誠護念のあり

現代語訳

『大無量寿経』には、「願生彼国 即得往生 住不退転」と説かれている。「願生彼国」は、浄土に生まれんと願え、という呼びかけである。「即得往生」は、その本願からの呼びかけに随順するところ、すなわち、信心を得るならば即時に本願の用らく世界に生まれるという意味である。「本願の用らく世界に生まれる」ということは、無上涅槃への志願を失わずに歩み続けられる、ということである。それは、即時に「必ず仏に成る身」に定まる、という教えである。これを「即得往生」というのである。「即」は、「即時」という意味である。「今この時」ということ、時間をあけず、日をへだてないという意味である。

おおよそ、あらゆる世界に広く行きわたることは、法蔵菩薩が立てられた四十八からなる大願の第十

親鸞仏教センターの動き

（2009・8・10）抄出

■2009年

- 8・7 親鸞聖人ご命日のつどい 常勤会
- 8・21 第16回鈴木大拙訳「教行信証」の考究 第40回「唯信鈔文意」研究会
- 8・27 第27回「通算第78回」連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）
- 8・31 第85回清沢満之研究会
- 9・1 機関紙「親鸞仏教センター通信」第31号を発行
- 9・2 第41回「唯信鈔文意」研究会
- 9・4 第33回現代と親鸞の研究会「森田療法と現代社会」森田療法研究所所長・北西憲二氏（文京区・東京ガーデンパレス）
- 9・11 親鸞聖人ご命日のつどい
- 9・12 学会発表（常塚聡研究員「近代日本における仏教と科学―真宗僧佐田介石を例として―」・日本宗教学会第68回学術大会・京都大学）
- 9・13 学会発表（春近敬嘱託研究員「近代ドイツ宗教思潮における仏教―ベックを事例として―」・日本宗教学会第68回学術大会・京都大学）
- 9・14 第86回清沢満之研究会
- 9・17 第17回鈴木大拙訳「教行信証」の考究
- 9・29 第87回清沢満之研究会「伝道者」から「求道者」へ―清沢満之との関係における暁烏敏の転機―毎田仏教センター所長・羽田信生（文京区・東京ガーデンパレス）
- 9・30 人事発令（楠宏生研究員が退職）
- 10・7 第42回「唯信鈔文意」研究会
- 10・9 親鸞聖人ご命日のつどい
- 10・27 第34回現代と親鸞の研究会「道徳と法について」立教大学教授・河野哲也氏（豊島区・メトロポリタンプラザ）
- 10・30 第88回清沢満之研究会
- 10・30 第28回「通算第79回」連続講座「親鸞思想の解明」（東京国際フォーラム）
- 10・30 第18回鈴木大拙訳「教行信証」の考究

● 清沢満之研究会報告 ⑧ ●

日本宗教思想史における清沢満之の位置

親鸞仏教センター研究員 山 本 伸 裕

2009年2月10日、東京文京区の東京ガーデンパレスに東京工芸大学芸術学部教授の加藤智見先生をお招きして、清沢満之研究会を開催した。清沢満之の思想を考えるには、残されたテキストだけでなく、その背景をなす日本宗教思想史という、より広い文脈・背景から思想を捉えなおしてみる必要があるのではないかという問題意識のもと、加藤先生には「日本宗教思想史における清沢満之の位置」というテーマでお話しいただくことになった。ここにその講義の一部を紹介する。



■ 「往生浄土」の二重性

親鸞聖人の浄土観には二重性が指摘される。その一つは、きらびやかで視覚的に捉え得る浄土、すなわち「方便化身土」であり、もう一つは視覚的ではなく、今、この、煩惱を離れた寂滅の境地としての浄土、すなわち「真仏土」である。こうした親鸞聖人の浄土の二重構造的な捉え方は一見矛盾するようにも思える。しかしながら、そうした発想にこそ親鸞のユニークな浄土観が表れているとも言えよう。このような二重性は、親鸞以前の浄土教にも、またキリスト教やイスラム教の発想にもないものだからである。むしろ、そこには親鸞聖人の、宗教性に高められた論理があると考えられる。

同様に満之もまた、ビジュアルな浄土観を必ずしも否定しているわけではない。満之は浄土という言葉こそあまり用いないけれども、信仰の二重性と宗教性の気づきという点で、親鸞聖人に通じる浄土観を持っていたと言ってよい。満之は絶筆となった「我信念」で、「来世の幸福については、まだ実験していないからわからない」と述べていたり、『在床懺悔録』で「即



加藤智見 (かとう ちけん) 東京工芸大学芸術学部教授
1943年、愛知県に生まれる。1973年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程修了。専門は、宗教学・仏教学・哲学。東京工芸大学助教授を経て、教授。同朋大学講師、愛知県一宮市の光専寺住職も務める。

著書に『図説 あらすじで読む親鸞の教え』（青春出版社）、『世界の宗教が面白いほどわかる本』『図解 宗教のことが面白いほどわかる本』（以上、中経出版社）、『図解 世界の三大宗教』（PHP 研究所〈監修〉）、『見つめ直す日本人の宗教心』（原書房）、『親鸞とルター—信仰の宗教学的考察』（早稲田大学出版部）、『仏像の美と聖なるもの』『浄土三部経のこころ』『蓮如とルター』『いかにして〈信〉を得るか—内村鑑三と清沢満之』（以上、法蔵館）、『世界の宗教と信仰—八つの型と共存への道』『誰でもわかる浄土三部経』『宗教のススメ—やさしい宗教学入門』『蓮如入門』（以上、大宝輪閣）、『他力信仰の本質—親鸞・蓮如・満之』（国書刊行会）、『シレジウス瞑想詩集』（共訳、岩波文庫）など多数。

また、『an'jali』第6号（親鸞仏教センター）に、「若者たちの心の中」を執筆いただいている。

得往生」を「信心発得ノ行者ハ其信決定ノ立所ニ浄土ニ往生スベキ大利ヲ得了スル事」と解釈していたりもしている。だが、その少し前に書かれた「親鸞聖人の御誕生会に」では、「我等、生老病死の苦悩に沈むとき、他力の大道は、永劫不変花笑ひ鳥歌う浄楽の一路を示して憂なからしむ」と言われ、また、『骸骨雑記第二』では「ヤガテ娑婆ノ縁ツクレハ目出度安養浄土ノ往生ヲ遂」げるとも述べられている。要するに、死後の極楽往生を単純に期待することについては批判しているとしても、親鸞

聖人同様、一概に視覚的な浄土観を否定したり拒否したりしているわけではないと考えられるのである。

■ 浄土の気づき

では、満之にいかにしてそのような浄土観が獲得されていったのか。そして、それをどのように自己の生に活かし、実践していったのか。それは満之の場合、言うまでもなく、人生のさまざまな苦悩を措いて語ることはできない。「明治二十七、八年の養病に、人生に関する思想を一変し、略は自力の迷情を翻転し得たりと雖ども」（「当用日記」）と言われているように、結核という不治の病に冒されたことは、満之にとって大きなきっかけであった。しかし満之は、ここで迷情を翻転し得たと言いながら「人事の興廃は、尚ほ心頭を動かして止まず」とも述べている。つまり、そこには自分が浄土に住まわせられているという自覚と同時に、完全には浄土に住み得ない人間なのだという自覚が表明されているものと考えられる。注意したいのは、こうした一見矛盾した気持ちの動き、二つの側面が互いに引き合ったり離れたたりするということである。つまり、宗教性というのはそういう動きのことを意味するのであろう。

エピクテトスとの出会いも、満之にとって、そうした浄土観を強化し、生きる力を獲得するのに大きな役割を果たしたと考えられる。満之がエピクテトスから学んだのは、「不如意」ということであった。それは、自分には分らないし、自分の力では左右できないということの意味するが、地獄極楽というのも、そういった如意を超えたものの一つであったはずである。満之は、地獄極楽が存在するかどうかは分らないと言いながら、分らないままにそうしたものを信じている。そうしたあり方のなかに、私たちは満之の宗教的な誠実さを見いだすべきではないだろうか。

■ 日本宗教思想史における位置づけ

満之のなかにははっきりとした形ではないものの、浄土観の二重性があらわれているように思われる。そうした浄土観には確かに親鸞聖人に通じるものがあるということはすでに述べたが、それを日本の宗教思想史のなかで捉えなおすとすれば、どんな位置づけが可能であろうか。

そこでまずは神道的な他界観との比較で考えてみたい。

周知のように、一口に神道の他界観と言っても、そこにはさまざまな要素が錯綜しているが、たとえば黄泉の国であれば、汚く悲しい他界であると考えられてきた。本居宣長などは、実際、黄泉の国というのは「きたなくあしき所」であり、死ねば必ず行かなくてはならないところであるから「此世に死する程悲しきことは候はぬ也」と書いている。このように、人が死んで黄泉の国に行くことは実に悲しいことで、希望も何もあったものではない。ところが宣長は死ねば靈魂は黄泉の国に行かねばならないとしても、その一部はこの世に留まらせることが可能だとも考えた。そこには、現世中心主義的な日本人の意識が表れているとも言える。そうした意識と満之の捉えた浄土の二重性にはどこか相通じるものがあるのではないか。

また、同じ仏教でも、たとえば「補陀落浄土」といった常世の国の観念と結びついた他界観が存在している。補陀落浄土というのは、南方の海の彼方の空間に存在する楽土と考えられてきた。それは、親鸞聖人や満之が考えた二重性を有する浄土観とは明らかに違うものであると考えられる。このことからしても、常世的浄土観に馴染んできた日本人にとって、親鸞や満之が捉えた浄土観がいかに実感しにくいものであったか、私たちにあってそのことを想像するのは決して難しいことではなかろう。だがそれ故にこそ、こうした浄土観は日本思想史上において画期的なものでもあったとも言えるのではないか。

※加藤智見氏の講義と質疑は、『現代と親鸞』第19号（2009年12月1日号）に掲載されています。



■ 親鸞仏教センター公開講演会2009のご案内

- ①テーマ 「現代における人間形成～科学教育と宗教教育～」
 ②日時 2009年12月11日(金) 18時～21時(受付:17時30分)
 ③会場 東京国際フォーラムG701
 〒100-0005 東京都千代田区丸の内3丁目5番1号
 ④講師 松田正典氏(広島大学名誉教授・くらしき作陽大学客員教授)
 ⑤講題 「親鸞と教育～化身の大地～」
 ⑥コメンテーター

清水博氏(東京大学名誉教授・NPO法人「場の研究所」所長)
 本多弘之(親鸞仏教センター所長)

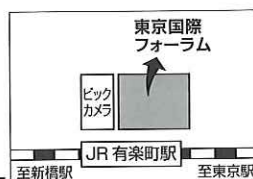
- ⑦聴講料 無料
 ⑧定員 200名(先着順)
 ⑨問い合わせ

親鸞仏教センター
 公開講演会2009 T係
 〒113-0023

東京都文京区向丘1-13-7

TEL 03-3814-4900・FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp



■ 親鸞仏教センター研究員と読む——公開輪読会2009

「親鸞思想の鉅脈をたどる」 参加者募集中!

2009年度の公開輪読会は、東京大学仏青会館(文京区・本郷)において、「親鸞思想の鉅脈をたどる」をテーマに、下記のとおり開催します。当センターの研究員と一緒に仏教の聖典をひもとく、自己とは何か、人間はなぜ悩むのか、人類の歴史を貫いてあきらかにされてきた仏教の言葉に、現代を生きる力を見出していきたいと思っています。初めての方もどうぞお気軽にご参加ください。(以下の詳細は、開催日程順です)

■「現代から『御文』を読む」(全4回)

蓮如は平かな日常語で仏教の教えを広く伝えようとした。現代に生きる私たちは、蓮如が伝えようとした教えをどのように受け取ればよいのだろうか。『御文』の言葉を通して、現代に生きる私たちの課題を考えてみたい。

日時: 2010年1月29日(金)
 2月5日(金)、12日(金)、19日(金)
 いずれも午後6時30分～8時30分

担当: 常塚 聡(つなづか あきら)研究員
 テキスト: 『御文』、『真宗聖典』(東本願寺出版部)より抜粋

資料代: 500円(4回分)



■「精神主義」の思想を問い直す～「我信念」を中心に～(全4回)

清沢満之晩年の思想は、一般に「精神主義」という名前で呼ばれてきたが、そこに、弟子たちの雑多で不純な思想が入り混じっていることはほとんど知られていない。

今回の輪読会では、そうした不純な思想的要素を可能な限り廃し、清沢晩年の思想の真髄に迫ってみたい。

日時: 2010年2月26日(金)
 3月5日(金)、12日(金)、19日(金)
 いずれも午後6時30分～8時30分

担当: 山本伸裕(やまもと のぶひろ)研究員
 テキスト: 『我は此の如く如来を信ず(我信念)』、『清沢満之全集』(岩波書店)より抜粋

資料代: 500円(4回分)



■申し込みと問い合わせ

参加ご希望の方は、下記までご連絡ください。参加費は無料ですが、資料代をご負担願います。定員35名。連続12回の講座ですが、途中からの参加も受け付けます。

親鸞仏教センター公開輪読会2009 T係

〒113-0023 東京都文京区向丘1-13-7

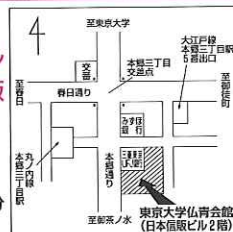
TEL 03-3814-4900・FAX 03-3814-4901

E-mail shinran-bc@tomo-net.or.jp

■会場

東京大学仏青会館2階ホール
 (文京区本郷三丁目・日本信販ビル2階)

東京メトロ丸ノ内線「本郷三丁目」駅徒歩3分
 都営大江戸線「本郷三丁目」駅徒歩1分



■あ と が き

昭和36年6月、鈴木大拙師は『英訳教行信証』の一応の翻訳が終わったことを本山へ報告している。そのとき、放送記者のインタビューに応じた大拙師は、翻訳の動機について、「いま世界がだんだん狭くなってくるんだから、ただ宝を自分のところにとっておいて、「こういうものがある」ということだけじゃない。やっぱり「これだ」と見せなきゃいかん」「(教えを世界へ)広める、広めぬ、じゃないんだ。みなが知ってなくちゃならぬ」(『真宗』昭和48年11月号)と熱く語っている。『教行信証』(本願念仏の教え)は、かけがえのない世界の宝。宝は独り占めするものでなく、分かち合うもの。分かち合っても決して減るものでなく、むしろ宝の輝きが増すと言われているようだ。翻訳に取り組まれた師の情熱に、教えが自らの宝になっているかと問われ、また教えを公に開いていく努力を怠ってはならないと徹を飛ばされたと感じた。(木曾) ▼清沢満之研究会では、親鸞聖人と清沢先生の願われた浄土を中心に講義が展開された。私と浄土の関係はどのようなものになっているだろうか。お金や力を依りどころとし、不安に慄(おのの)き、自分ひとりが生き残ろう

と、簡単に他者を排除しようとする。日々、争いの種の芽生えである。この争いの種はいたるところで芽生え、勢いよく成長し、あらゆるものを覆い異形化させる。われわれの本来あるべき姿とは何か。「自分が浄土に住まわされているという自覚と同時に、完全には浄土に住み得ない人間なのだという自覚」ということを丁寧に聞き開き、不安というものは、実は菩提心の芽生えなのだと思える人間になりたい。(大江) ▼ドラえもんがいたらいいのに。子供の頃から何度思ったことか。ドラえもんは望みの数だけ新しい道具を出して欲望を満たしてくれる。素敵だ。現実の世の中を見渡してみると、物はあるけれど、大体のことは不自由なく過ごせるようになっている。だけど、私は心から満足してはいない。あと足りないのは…もしドラえもんがいたら、物では満足しない私は自分の欲望を満たすために人をも変えていくのだろう。親鸞聖人は、欲望はなくなることはない、煩惱が完璧に備わった存在が人間なのだと教えてくれる。どんなにお金があってもドラえもんがいなくても、心の底から満足することはないのが私なのだ。同時にそんな私が心の底から満足する世界も教えてくれる。教えてもらっても、私はまだその世界に気づかないようだ。(鈴木)